論文の内容の要旨

論文題目　　カンボジアの建築家ヴァン・モリヴァン(1926-2017)に関する建築史的研究：国家揺籃期における建築家の課題

氏　　名　　岩元　真明

本論文は、カンボジアの建築家ヴァン・モリヴァン（Vann Molyvann, 1926-2017）を主題として、近代国家揺籃期における建築家の課題について考察を行うものである。フランスから独立した 1953 年から内戦が勃発した 1970 年までのカンボジアでは、ノロドム・シハヌーク率いるサンクム・リアハ・ニヨム政権下で急速な国家建設と近代化が推し進められた。「新クメール建築」と呼ばれる近代建築運動が花開いたのはこの時代であり、シハヌークに重用されたモリヴァンはその中心的人物であった。モリヴァンは 1926 年にカンボジアで生まれ、1946 年に渡仏しエコール・デ・ボザールで建築を学び、カンボジア人初の公認建築家となった。そして、1956 年にカンボジアに帰国し、公共事業電信省の高官および個人建築家として 80 を超えるプロジェクトに関わった。また、彼はクメール文化に関する研究を独自に行い、1965 年には王立芸術大学の初代学長となってカンボジア初の建築学部を創設、1967〜1969 年には教育文化大臣を務めた。しかし、1970 年にカンボジア内戦が始まり、1971 年に亡命を余儀なくされた。ゆえに、モリヴァンの建築家としての活動時期は留学から帰国した 1956 年から内戦により祖国を離れた 1971 年の約 16 年間に集中している。

モリヴァンとその作品に関する研究は、1990 年代にプノンペンの都市研究の一部として始まり、Ross and Collins（2001）による概説的な研究を経て、近年になって松原（2015）や Nelson（2017）による一次資料に基づく学術的な研究に至った。しかし、これらの研究はモリヴァンの多様な仕事の断片的な知見を得るにとどまっている。このような状況を踏まえ、本論文では多くの新資料を用いてモリヴァンの活動を多角的に論じることを試みている。

本論文の目的は、1950〜60 年代カンボジアにおけるモリヴァンの仕事を精査し、国家の自立と近代化のためにモリヴァンが行った多様な取り組みを具体的に明らかにすることである。さらに、モリヴァンを他国の建築家と比較することによって国家揺籃期における建築家の課題を一般化して考察し、そこからモリヴァンの仕事における真に固有で独創的な部分を浮き彫りにする。その際、本論文では彼の広範な仕事を解きほぐし、1) 自己形成と職能形成、2) ナショナル・アイデンティティの表現、3) 気候風土への適応、4) 現地資源の活用、5) 人材確保、という 5 つの課題に対する取り組みに焦点を当てて議論を行う。自国民の中から建築家を輩出し、国家的な意匠と現地に適応した居住環境をつくりだし、モノとヒトをローカライズすること

は、旧宗主国および欧米列強への依存を断ち切り、国家を自立させるための重要課題であった。第二次世界大戦後に相次いで独立を果たした東南アジア諸国も、1950〜60 年代には類似した状況に置かれ、類似した課題に直面していた。

この作業の主たる意義は以下の３点にある。第一に、国家と緊密に結びついて仕事を行ったモリヴァンの仕事を理解することによって、カンボジアの国家建設史の一端が明らかとなる。第二に、モリヴァンの仕事の検証は、カンボジアと前後して独立を果たした東南アジア諸国における建築分野の脱植民地化プロセスを理解する上で有用なケーススタディとなる。そして第三に、より広い視野に立てば、モリヴァンの取り組みを把握することから、日本を含めた非西洋において建築家が国家建設時に果たした役割を検証する比較材料が得られる。国家にまつわる建築的課題は、多くの建築家と専門家によって、長い時間をかけて取り組まれるのが通例である。しかし、モリヴァンは 16 年間という限定された時間において、多様な国家的課題に主導的な立場で取り組んだ。ゆえに、彼の活動は精緻に検証可能であり、その結果は他国の建築家を相対化する際の理想的な比較材料になる。このような観点から、本論文では新たな政体をもつ近代国家が誕生し、それが政治経済的・文化的に安定するに至るまでの時期を国家揺籃期と仮定し、独立まもなくのカンボジアの状況をこの国家揺籃期という広い枠組みの中に置いて議論を行う。

本論文の主たる研究の方法は、資料調査、インタビュー調査、建築作品の現地調査の 3 つである。資料調査では、1920〜70 年代に発行された公文書・出版物等の読解を通じて当時の社会状況とモリヴァンの活動・思想を分析する。さらに、建築作品の設計図書・写真を一次資料として収集し、その分析を通じてモリヴァンの設計意図や設計思想を考察する。ただし、カンボジア内戦期に多くの資料が散逸したため、現在閲覧できる文書資料等から理解が困難な事柄も多い。そこで、ヴァン・モリヴァン本人および関係者に対するインタビュー調査、現存する建築作品の現地調査、先行研究者が作成した実測図面の分析によって情報を補完する。

本論文は序論、5 章からなる本編、結論から構成され、モリヴァンの主要作品をまとめた資料編１とインタビュー記録をまとめた資料編２がこれに加わる。本編の１〜５章は先に挙げた 5 つの課題に対応している。

第 1 章では、モリヴァンのパリ留学時の活動に焦点を当て、モリヴァンがカンボジア初の公認建築家となり、国家的な建築活動を開始した経緯を明らかにした。植民地下のカンボジアでは、中等教育の改善、留学の促進、クメール古典建築研究の進展などによって建築家が育つ環境が整いつつあった。モリヴァンは大物政治家ペン・ヌートをパトロンに付け、エコール・デ・ボザールに留学して建築を学び、フランス政府公認建築家資格を取得した。また、パリではフランス人のモダニストや東洋学者、クメール人学生組織と緊密なネットワークを築いた。そして、カンボジア独立後に帰国し、シハヌーク王子から信頼を得て、公共事業省に入省して国家建築家として活動を開始した。

第 2 章では、「伝統と近代の統合」というモリヴァン作品の鍵概念に着目し、ナショナル・アイデンティティに関わるモリヴァンの設計思想と設計手法を明らかにした。モリヴァンは伝統の源流としてアンコール建築と木造建築の 2 つを見出し、クメールの伝統建築と西洋古典建

築の間には共通点があると述べ、伝統建築の近代化と近代建築のクメール化を同時に行い、独立国家にふさわしい新しい建築の姿を模索した。設計手法としては、伝統的な装飾・形態を近代建築にあてはめる形態的アプローチと、その構成や空間原理を近代建築に応用する原理的アプローチの両方を採用したが、作品を重ねるにつれて第二のアプローチが優勢になる傾向が見いだされた。形態的アプローチから原理的アプローチへの推移には、ケン・ヴァンサックが提唱したクメール語の正書法改革との関連が指摘され、伝統・西洋からの形式的借用を乗り越える独立運動の一部として解釈された。

第 3 章では、資料分析と計画学的・環境工学的な観点による作品分析を行い、ヴァナキュラーな民家から気候適応の術を学ぶというモリヴァンの設計思想と、遮熱と通風に重きをおいた設計手法を明らかにした。モリヴァンはル・コルビュジエの造形的スタイルを発展させ、カンボジアの気候に適応させることによって、ピクチャー・ウインドウを備えた換気壁や筒状の通気管を反復した二重屋根といった独特の建築表現に達した。このような設計手法によって、モリヴァンはコロニアル建築から脱すると同時に、モダン・ムーヴメントの軌道修正を行った。

第 4 章では、資料分析と作品分析を通じてモリヴァンによる材料選定と材料表現の特徴を明らかにした。モリヴァンは砂、石、木、レンガ、タイルといった地場材を多く使用しながら近代的表現を獲得することを目指した。構造材に関して言えば、モリヴァンは帰国直後には鉄骨造を試みたが、後に打ち放しコンクリートを好むようになった。この傾向は、アジア、南アメリカ、アフリカの新興国に広がったブルータリズムの世界的流行と軌を一にしている。このような材料選定と材料表現の背景には、手に入る材料でやりくりしようとする現実主義と、地場産業を促進してモノカルチャー経済から脱しようとする意図の双方があった。

第 5 章では、モリヴァンによる設計体制の構築と人材育成の特徴を明らかにした。モリヴァンの人材確保の方法は、独立以前にカンボジアに渡ったフランス人やベトナム人との協働から始まり、国連開発計画や大林組の専門家との協働を経て、海外留学組のカンボジア人材の登用に至り、最終的には王立芸大におけるカンボジア人建築家の育成へと移り変わった。このような設計体制の変遷と教育への関与の各段階は、植民支配を経験した他の東南アジア諸国にも認められる。

以上の各論を踏まえて、結論ではモリヴァンの試みを他国の建築家と比較し、国家揺籃期における建築家の課題全体について考察を行った。5 つの課題に関して、モリヴァンと他国の建築家の取り組みの間に多くの類似が認められたことから、非西洋の国家揺籃期の建築家には共通した思考形式と態度があり、それ自体が欧米列強からの独立を獲得するプロセスの一部であると結論された。そして、このように国家揺籃期の建築家に共通項を認めることによって、その残余としてモリヴァンの建築作品の固有性が明らかにされた。さらに、各課題を俯瞰することによって、サンクム・リアハ・ニヨム期におけるモリヴァンの多様な活動が「旧植民地体制の継承の時代」に始まり「国際援助を活用した躍進の時代」を経て「現地人材を活用した自立の時代」に達したと結論された。このような変遷過程は、建築分野における脱植民地化プロセスをモデル的に示すと考えられる。